



防衛研究所

The National Institute for Defense Studies

多次元統合防衛力の構築にむけてー 5

ー戦史（ガダルカナル島作戦）を事例としてー

NIDS コメンタリー

戦史研究センター 史料室所員 齋藤 達志

第 133 号 2020 年 8 月 4 日

はじめに

新たな防衛計画の大綱（「平成 31 年度以降に関わる防衛計画の大綱について」（平成 30 年 12 月 18 日国家安全保障会議及び閣議決定）、以下「大綱」という。）において、我が国の防衛力は、「多次元統合防衛力」を目指す¹とされた。このことは、宇宙・サイバー・電磁波という新たな領域（ドメイン）と陸・海・空という従来の領域を有機的に融合し、その相乗効果により全体としての能力を増幅させる、つまり、領域横断（クロスドメイン）作戦を重視するということである¹。

一方、我が国には数多くの島々が存在し、これらの防衛においては、特に近年、南西諸島の防衛態勢強化が指摘されているところである²。この南西諸島の防衛についても、クロスドメイン作戦をもって敵の攻撃を阻止・排除し、侵攻企図を破砕することが必要である。

このような大綱のいう多次元統合防衛力及びクロスドメイン作戦というものを我々は具体的にどのように考えればいいのか、その案出に当たっては、過去の戦史から多くの手がかりが得られるのではないかと。よって、本稿においては、近年注目されている、島嶼部を含む我が国に対する攻撃への対応について、かつて日本が経験した島嶼作戦の戦史、ガダルカナル島作戦から多次元統合防衛

力、クロスドメイン作戦の原点をたどりその重要性及び現在の島嶼防衛に対する示唆を導いてみたいと思う。

1 なぜ、ガダルカナルなのか

(1) ガダルカナル島作戦の概要

ガダルカナル島（以下、ガ島）は、「餓」島といわれるように多くの将兵が戦病死で亡くなったことで知られる（戦闘損耗約 20800 名中 1.5 万名前後といわれる³）。その原因は、日本軍が制海権、制空権を獲得できなかったことによる。1942 年 8 月 7 日、日本軍の警戒の虚を突きガ島に奇襲上陸した米軍は、ルンガ岬の一角に飛行場を含んだ海岸堡⁴（ヘンダーソン基地）を占領した。日本軍は、ニューギニアの確保とあわせて南太平洋に長期不敗の戦略態勢を確立するため、ガ島の奪回を図った。しかし、堅固に防御された海岸堡を破壊し、ガ島を奪回するためには、大砲、戦車など重戦力を装備した陸軍部隊を輸送船でガ島に投入しなければならなかった。海岸堡を防衛する米軍も同様である。こうして日本軍と米軍でガ島に対する戦力の集中競争が行われた。この集中競争の主体をなす手段は、船舶輸送であり、この船舶輸送に付随して多くの海戦、航空戦が生じた。日本軍が

1 防衛省『令和元年版防衛白書 日本の防衛』218 頁。

2 防衛省『令和 2 年版防衛白書 日本の防衛』252 頁。

3 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 大本営海軍部・連合艦隊〈3〉』（朝雲新聞社、1974 年）

516-517 頁。

4 上陸軍が上陸後兵力の集結をおわり、内陸進攻を発進するまで自己を掩護するため上陸点付近に設備した陣地（防衛省防衛研修所戦史部『戦史叢書 陸海軍年表』（朝雲新聞社、1980 年）336 頁。）

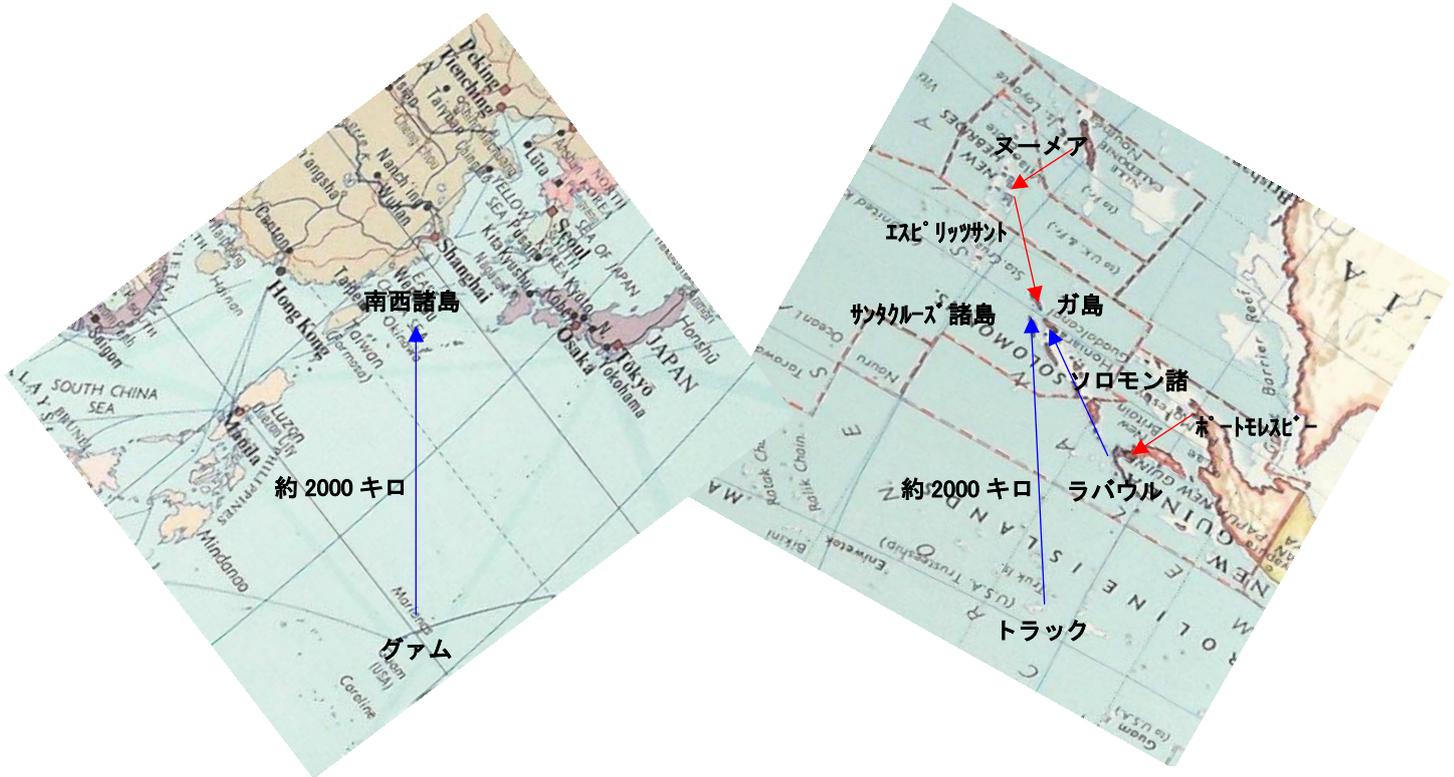
真面目に重戦力を積載した輸送船団を送り込む機会は全期間通じて 3 回ほどあったが、いずれも失敗した。特に 3 回目の船団輸送（1942 年 11 月 11 日～14 日）では、第 3 次ソロモン海戦が生起し、日本海軍は連合艦隊の主力艦である戦艦「比叡」と「霧島」を失い、制海空権は完全に米軍のものとなった。この間、米軍の船団輸送は継続され、集中競争の軍配は米軍に上がったのである。以降、ガ島は、「餓」島と化す。

(2) ソロモン諸島と南西諸島

ガ島作戦は、輸送船をガ島に送り込むための制海権、制空権を賭けた戦いであった。いわゆる水陸両用作戦⁵である。この水陸両用作戦を行うための空間は、海上、海中、空中、陸上などのキネティック⁶な領域であり、また、通信、電

磁波などのノンキネティックな領域も重要な価値をもちはじめてきた。すなわち、日米双方にとってガ島作戦はクロスドメイン作戦であった。

このクロスドメインなガ島作戦が行われた戦域は、南太平洋であり、地域的には、トラック諸島（現チューク諸島）～東部ニューギニア～ソロモン諸島～ニューカレドニアである。つまり、日本軍はラバウルを基地とし百武晴吉中将指揮する陸軍部隊の第 17 軍を東南約 1000 キロのガ島に輸送し、あわせてこれを護衛する海軍及び航空部隊も出撃した。さらにこれを掩護若しくは米艦隊の撃滅を企図する山本五十六大將指揮する連合艦隊は、ガ島北方約 2000 キロのトラック島に位置した。一方、ロバート・L・ゴームレー中将（42 年 10 月以降ウィリアム・ハルゼー・ジュニア中将）指揮



(図 南西諸島とソロモン諸島 『ATLAS OF THE WORLD』 THE TIMES COMPRENSIVE EDITION TIMESBOOK 1997 から引用)

⁵ 敵又は潜在的な敵の海岸への上陸に伴う海からの行う攻撃のこと。（中矢潤「我が国に必要な水陸両用作戦能力とその運用上の課題」『海幹校戦略研究』（海上自衛隊幹部学校、2012 年 12 月第 2 巻 2 号））

⁶ キネティックとは、「動力的な」という意味。キネティック作戦は、キネティック兵器を

使った作戦のこと。ノンキネティック作戦とは、運動エネルギー以外の手段（電磁波、サイバー空間など目に見えないことが多い）を使った作戦のこと。（渡部悦和・佐々木孝博『現代戦総論—超「超限戦」』（株式会社ワニブックス、2020 年） 25 頁。）

する米南太平洋戦域軍は、ニューカレドニアのヌーメアに司令部があり、その北方約 800 キロ、ガ島から南東約 1000 キロに前進基地、エスピリッサント島があった。また、ダグラス・マッカーサー大将指揮する南西太平洋戦域軍は、ラバウル南方約 800 キロの東部ニューギニア南岸のポートモレスビーに航空基地をもち、ラバウルを爆撃機の射程距離内に治めるとともに、ニューギニア北岸のブナに攻勢をかけていた。(図 南西諸島とソロモン諸島)

先に南西諸島の防衛態勢強化について触れたが、連合艦隊の基地トラック島を現在米軍基地のあるグアム島、ガ島のあるソロモン諸島を南西諸島、ラバウルを九州付近、エスピリツサントを中国南部海南島付近、ニューギニアを中国東部上海付近にスライドして置き換えてみては、と提案したい。つまり、ガ島作戦において連合艦隊がトラック島からソロモン諸島に向けた南太平洋地域は、米軍基地のあるグアム島から南西諸島に向かう東シナ海を含む北西太平洋地域に距離、位置関係など概ね類似しているのである。よってガ島作戦を研究することは、現在の南西諸島の防衛態勢強化に資する研究にも通じるのではないかと考えるのである。

2 ガ島作戦とクロスドメイン作戦

先にガ島作戦はキネティック、ノンキネティックの領域の戦いを含むクロスドメイン作戦であるということに触れたが、ここでは、具体的な事例を紹介したい。

(1) 電波、電磁波領域におけるノンキネティック戦

当時、当然ながら宇宙・サイバーというドメインは存在しないものの、目に見えないノンキネティック戦はガ島作戦の明暗に大きく影響を

及ぼしたのである。

1942 年 9 月頃までガ島周辺空間では、米国側がガ島ヘンダーソン飛行機の掩護の下に昼間、海上を支配、逆に夜戦に長けた日本側は夜に入るとこれを支配するという状況が生起していた。しかしこれが崩れたのが 10 月 11 日のサヴォ島沖海戦である。ガ島砲撃を命ぜられた第 6 戦隊の旗艦「青葉」は、ガ島の砲撃終了後、約 7000 メートルの距離に「敵」艦船を発見した。その瞬間、上空に照明弾が炸裂、「青葉」は集中射撃を受けた。初弾は艦橋正面に命中し、爆発はしなかったが五藤存知司令官以下多数の幹部を死傷させた。米軍にレーダー探知され、先制攻撃を受けたのである。9 隻の米艦隊が待ち伏せしていたが、軽巡洋艦の「ボイス」と「ヘレナ」の 2 隻が SG レーダーを搭載していた。このレーダーの出現は、「夜戦には絶対の自信」をもつ日本海軍の自信を喪失させたのである。日本側では、米軍がレーダー射撃を実施していることが明らかとなったからは、「見張用電探、射撃用電探なくしては戦争は出来ない」との要望が強くなっていった⁷。

また、11 月 12 日の第 3 次ソロモン海戦でも、米戦艦「ワシントン」は、レーダーによる射撃指揮の利点を発揮して、その 40 センチ砲弾と 12.7 センチ砲弾で連合艦隊の主力艦である戦艦「霧島」を撃沈した⁸。この米軍の夜間射撃を可能にしたのは、レーダー情報と無線電話利用による戦闘情報センター (CIC) であった。連合艦隊は、レーダーもさることながら情報のシステム化、その結晶である CIC システムに負けたのである。一方の日本海軍の旗艦には作戦室を設けていたが、極論すれば海図と電話があっただけで CIC のようなリアルタイムの兵棋室設置の発想はなかった⁹。日本の艦艇にも初期のレーダーは装備されてはいたが、当時の日本

⁷ 寺部甲子男「レーダー・システムと海戦」『太平洋戦史シリーズ 第 5 巻 ソロモン海戦』(学習研究社、1996 年) 139-140 頁。

⁸ C・W・ニミッツ・E・B・ポッター『ニミッツの太平洋海戦史』(恒文社、1962 年) 140 頁。

⁹ 寺部「レーダー・システムと海戦」138-141

人には高度な電子システムを効果的に運用できなかったのである。

一方、ラバウルからの日本軍の行動を監視していたのは、豪州軍の沿岸監視隊であった。この監視隊は、ビスマルク諸島とソロモン諸島の海岸に沿い、小さなラジオ・ステーション網に人員を配置していた。彼らはいつも携帯用無線機で連絡を取り、忠誠な現地民の援助を受け、日本軍の艦船、地上部隊、飛行機の動静について、連合軍指揮官に極めて有効な警報を報告した¹⁰。ラバウルから発進した日本海軍航空隊の第一波をいち早く報告するのはブーゲンビル島の沿岸監視員である。この報告により、ガ島で待機する米軍戦闘機及び空母艦載機が強力な上空警戒網を張り、日本海軍航空隊機を待ち受けるのである。

また、11月初め、日本軍第38師団の大部と重戦力を満載した第3次船団輸送の輸送船12隻を含む大船団を水平線上に最初に発見し通報したのは(11月6日)ブーゲンビル島西端の豪軍監視員であった¹¹。この船団の輸送船は、大半がガ島到着前に米軍の空襲に遭いほぼ全滅し、ガ島に到達したのは僅かであった。この船団輸送の失敗によって、日本軍は大部隊をガ島へ送り込む作戦を断念したのである。

さらに米軍は、暗号解読を介して日本軍の行動を掌握していた。米太平洋艦隊に直属する通信諜報組織、俗に戦闘情報班(CIU、後に太平洋艦隊無線班(FRU))が、JN-25という日本海軍の艦隊用暗号系を解読する任務に就いていたのであった¹²。

E・B・ポッター『キル・ジャップス』¹³によると、ハルゼー中将は、10月24日前後に日本の機動部隊(第3艦隊)がトラックを出撃しており、その

目的地もどこか、という情報を入手していた。このため、彼は、10月24日、空母「エンタープライズ」「ホーネット」を含む第61任務部隊を指揮するキンケード少将に対し、ガ島東方約500キロのサンタクルーズ諸島の北方海域に前進するように命じた。つまりトラックからガ島に向かい南下する第3艦隊の左側面に待機させたのである。これは、ミッドウェー海戦の再現を狙うものだった。26日、情報通り、第3艦隊は予想海域、サンタクルーズ沖に現れ、ここで日米の機動部隊が遭遇し、南太平洋海戦が生じた。しかしながら待ち伏せ攻撃を受けた第3艦隊は善戦し、空母「ホーネット」を行動不能にし、「エンタープライズ」に大損害を与えたが、執拗な米艦載機の攻撃は、空母「翔鶴」を大破、「瑞鳳」を中破させ、多くの搭乗員を戦死させた。この結果、日本の機動部隊は、後のマリアナ沖海戦まで再起不能となったのである。

このように、ガ島作戦においても目に見えないノンキネティック戦は、宇宙やサイバー空間こそないものの、通信、電磁波の中では存在していた。当時の日本軍は、猛訓練をもって夜間を克服し、「猫の目」をもっていたが、人間の目には見えない領域には、被害を受けてようやく関心を向けるに至ったのである。また軍事技術も遅れていた。

(2) 陸・海・空領域におけるキネティック戦

先に述べたとおり、日本軍は米軍との重戦力の集中競争に敗れたのであり、ガ島争奪戦の敗因であった。これは、ノンキネティック戦と有機的に融合された、陸上、海上、空中、海中の領域で行われたキネティック戦の結果であった。ここでは、日本軍の敗因と考えられる3つの事例を紹介したい。

頁。

¹⁰ ニミッツ・ポッター『ニミッツの太平洋海戦史』112頁。

¹¹ 森山康平「ソロモンの連合軍の耳目となった沿岸監視隊」『太平洋情報戦 別冊歴史読本 第65(461)号』(新人物往来社、1998年)75頁。

¹² デーヴィッド・カーン著秦郁彦・関野英雄訳『暗号戦争』(明光社、1968年)92-93、98頁。

¹³ E・B・ポッター著・秋山信雄訳『キル・ジャップス』(光人社、1991年)270頁。

まず第 1 は、戦局の天王山を予測し、これに間に合うよう重戦力をガ島の要衝（ヘンダーソン基地への砲兵の観測射撃が可能）であるマタニカウ川付近（ヘンダーソン基地西方約 6 キロ）に集中することが出来なかったことである。一木支隊（8 月 20～21 日）、川口支隊（9 月 13～14 日）の攻撃を阻止したものの、海岸堡がまだ不十分と認識している第 1 海兵師団長アレクサンダー・ヴァンデグリフト少将にとって最も苦痛とすることは、日本軍がマタニカウ川付近一帯に拠点を設け、ここから繰り出す重戦力をもって海岸堡を攻撃することであった。まさしく第 2 師団が総攻撃を予定していた 10 月中旬は、ガ島戦の天王山であり、これに間に合うように陸海軍（航空隊、潜水艦含む）の戦力を集中して重戦力をガ島に揚陸させる必要があったのである。この任務をもつ輸送船 6 隻は夜間、ガ島に到達したものの、夜明けとともに、ヘンダーソン飛行場を飛び立った米軍機により爆撃され壊滅した。このために第 2 師団は歩兵主体の迂回攻撃を行ったのである。当時、連合艦隊の主目的は、米機動部隊の撃破にあり、揚陸完了までの掩護には関心を払っていなかった。陸軍は、「輸送が完全に行われて初めてガ島の制圧が可能」、海軍は、「輸送のためにはガ島の飛行場制圧が先決」とそれぞれ主張したが、この二つの主張を調整し、いわば止揚する機能がなかった。つまり、共通の目的を達成するという陸海軍の統合がなかったのである。

また、水中においても日米の潜水艦戦が行われていた。米潜水艦は、ソロモン諸島の日本軍を増強しないようにトラック諸島以南の補給線遮断を試みたのに対し、日本の潜水艦は、軍艦のみを価値ある目標とし、一方で往来する米軍の海上輸送船団にはほとんど関心を向けなかった。

9 月 15 日、伊 19 号潜水艦が米第 7 海兵連隊

の輸送船団を護衛していた空母「ワプス」を撃沈した。これで米軍が当時太平洋で使用できる空母は、「ホーネット」1 隻のみ（日：3 隻）となり、この時点で、ゴームレー中將は、もはやガ島を保持できないと判断していた¹⁴。しかし、戦力集中競争の中核であった第 7 海兵連隊約 4300 名、戦車、武器、弾薬、糧食等を搭載した船団は無傷で 18 日、ルンガ泊地に到着した。つまり、日本軍の戦力は、各領域に分散していたのである。

第 2 は、連合艦隊が、制海権を確保できなかったことである。南太平洋海戦（10 月 26 日）は、待ち伏せされていたとはいうものの、当時、戦力優勢な連合艦隊が待ち望んでいた米機動部隊との決戦であった。しかし、第 3 艦隊は、劣勢の米機動部隊を捕捉撃滅し、制海権を獲得することはできなかった。これは、彼我伯仲の中、自らの旗艦「翔鶴」が米艦載機の爆撃により大破したため、有利な態勢にあるにもかかわらず、米空母との距離を開くため全軍を一時退避させるなど悲観的な戦闘指導に甘んじた第 3 艦隊司令長官南雲忠一中將に対し、ハルゼー中將が、積極的攻勢を以て第 3 艦隊を機能喪失に陥れたことによる。ニミッツ大將が後で語ったように連合艦隊には、米艦隊を探し求め、これを撃滅することによってガ島を孤立化させ、制海権と制空権を自らのものにしてしようとする強いリーダーシップがなかったのである¹⁵。

第 3 は、東部ニューギニア北岸のブナを失ったことであろう。南西太平洋戦域軍司令官マッカーサー大將は、東部ニューギニアから常にラバウルとソロモン諸島の作戦線に背後から脅威を与え、ハルゼー大將を支援した。連合軍は、日本軍を二正面作戦に追い込んだのである。本来ならば内線の態勢に陥った日本軍はこの連繫を断ち切り、ハルゼー、マッカーサーを各個に撃破する必要があったが出来なかった。そして 12 月 14 日、東

¹⁴ ポッター『キル・ジャップス』262 頁。

¹⁵ ニミッツ・ポッター『ニミッツの太平洋海戦

史』148 頁。

部ニューギニア、ブナは陥落、ラバウル～ソロモン諸島背後の脅威を強く認識した日本軍は、ガ島からの撤退を決意した。

このように従来陸・海（海中）・空という領域においても日本軍は戦力を分散し、海、空、陸と各個に撃破された。戦場における統合の面でも米軍に劣ったのである。

(3) その他の領域

渡部悦和氏は、「将来の戦場における最も決定的な要素は、双方のアルゴリズムの質であろう。戦闘は、人間がついて行けないレベルにスピードアップすることになる」¹⁶と述べている。現在、このアルゴリズムは AI が行い、人間の認識力を強化、決心のための意思決定の思考過程（OODA ループ¹⁷）のスピードを劇的に加速させる。当時、AI はないが、日米の意思決定の速度の差は明確であった。

10月13日、第2次輸送船団を掩護するため、ラバウル基地航空部隊の空爆、戦艦「金剛」「榛名」の総計 920 発に及ぶ夜間の艦砲射撃がヘンダーソン基地、飛行場に対し実施された。航空機、滑走路、燃料、弾薬は壊滅的被害を受け、ゴームレー中将は、「ガ島を持ちこたえることが出来るか不安である」旨を太平洋艦隊司令官チェスター・ニミッツ大将に報告した¹⁸。このような状況から、米軍は駆逐艦、潜水艦まで投入して輸送隊を編成し、燃料、弾薬などを輸送した。南太平洋航空部隊司令官ミラード・ハーモン少将は、「ガ島は現在以上の海軍部隊の支援がなければ保持できないだろう」と本国の参謀総長に緊急電を送った¹⁹。日米両軍、それぞれ必死の輸送競争を

行っていたのだ。

当時、欧州、北アフリカ、太平洋、いずれの戦場を重視するか悩まされた米統合参謀本部は、「入手可能なあらゆる兵器を、ガダルカナル保持のためその地域に確実に送れ。この危機に際し、ガダルカナルを保持せよ。」という大統領の指示により、ガ島に大量の兵器を送ることを決定した²⁰。同時期、ニミッツ大将は、すべてに消極的に見えたゴームレー中将を更迭し、猛将ハルゼー中将を任命した。

一方、ガ島を日米決戦の場とするかどうかを船舶増徴問題に置き換え議論していた日本政府と陸海軍統帥部は、その紛糾を大本営陸軍部作戦部長の更迭という人事問題にまで発展させたが、その解決は 12 月 10 日の御前会議における聖断を仰ぐしかなかった²¹。スピードが重視される意思決定に対し、日本の戦争指導機構には、官僚的な下からの積み上げでしか意思決定がなされないという大きな問題があった。

また、戦域レベルにおいては、統合軍となっていたハルゼー大将（11月19日、制海空権獲得の功績で昇任）、マッカーサー大将などの戦域軍司令官が、逐次に決心し、目的、論理の明確な作戦計画をもって陸軍、艦隊、航空隊、海兵隊を指揮した。一方、日本軍は、まず、陸海軍統帥部がそれぞれ起案した作戦計画を中央協定という形にまとめ、陸海軍がこれを尊重して協同作戦を実践した。それ以下の各部隊レベルでも同様なことが繰り返された。それぞれ陸海軍の意見が異なる場合は、それを調整して統一する権限のあるものはいなかったのである。

¹⁶ 渡部・佐々木『現代戦総論—超「超限戦」』266頁。

本書では、現代戦における AI 同士の戦いを「アルゴリズム戦」と表現し、アルゴリズムは、「問題を解くための手順を定型化したもの」とする。

¹⁷ 米空軍のボイド大佐が開発した迅速な意思決定の思考過程。状況を観察し、決心の選択肢を案出し、決心の方向性を明確にし、決心し、行動する、という思考過程をいう。（渡部・佐々木

『現代戦総論—超「超限戦」』179頁。）

¹⁸ 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 南東方面海軍作戦〈2〉』（朝雲新聞社、1975年）253頁。

¹⁹ 同上、254頁。

²⁰ ポッター『キル・ジャップス』277頁。

²¹ 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 大本営陸軍部〈5〉』（朝雲新聞社、1973年）532-533頁。

3 おわりに

以上のようにガ島作戦の戦史は、決して十分であるとはいえないものの、現代に通じるキネティック、ノンキネティックな領域における多次元統合防衛力の重要性を十分に認識させる。特に本稿で触れた範囲内でのガ島作戦における教訓を現代の南西諸島防衛に反映させると、大きくとらえて以下のことがいえるであろう。

○離島作戦における要点先取の必要性

特に離島作戦においては、一旦強固な海岸堡を設定されるとその奪回が困難なことから、あらゆる事態において警戒を緩めず、さらに要衝を先取させないことが重要である。また、離島の要点は、我が事前に確保することが望ましい。

○統合運用充実の必要性

輸送船団を目的地に送り戦力を発揮させるため、陸、海（海中）、空の個別のドメインでの戦力発揮を最大限に生かし、かつ、ドメインを超えた有機的連繋を行う準拠となる統合教義を確立することが重要である。

○新領域における変革の必要性

米国の艦艇に搭載されたレーダー及び戦闘情報センター(CIC)は、1940年7月から10月に英国上空で行われた英空軍と独空軍の航空戦（バトル・オブ・ブリテン）における英の迎撃レーダーシステムから資を得たものであるといわれる。レーダーは日本軍も装備していたが、米国はさらに海上における電磁波領域における戦いの変革に至るまで発展させた。このような新たな技術を戦いの変革、イノベーションに発展させることが重要である。

縷々述べたが、ガ島作戦の戦史は、地勢的類似性をもつ南西諸島の防衛態勢強化を考察する上で参考となる事象に富むと考える。また、さらにガ島戦史の研究を深めることにより、戦争という生死を賭けた不確実性の中で、研究者の探究心に呼応して、その実相がどのようなものだったのか、ひいては戦争の本質を教えてくれるであろう。

プロフィール

profile

戦史研究センター
史料室所員
2等陸佐 齋藤 達志

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通：03-3260-3011

代 表：03-3268-3111（内線 29171）

FAX：03-3260-3034

※ 防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.mod.go.jp/>